かほく市立大海小学校

10月号

運動会

赤組はみんなと心を１つにして、２連覇をめざしましたが、残念でした。みんな私の100倍も1000倍も大きな声で、応援してくれてありがとうございました。

赤組団長 [redacted] 優里加

学校だより

平成25年10月1日(火)発行

６年間の最高の思い出となりました。団長としてみんなをまとめ、引っ張ることをことが出来たでしょうか。「絶対勝つ」の気持ちで一生懸命頑張ってくれてありがとうございました。

白組団長 [redacted] 鈴花

『わが教師十戒』

校長　油井宏樹

宝達山の栗もたわわに実り、収穫の秋を迎えました。先日の台風１８号は、日本各地に大きな被害をもたらしましたが、本市では大きな被害もなく、この地に住んでいる幸せを感じております。被害を受けた他県の皆様には心よりお見舞い申し上げます。それにしても今年の夏は、梅雨明けが遅く、梅雨が明けた途端に猛暑続き。そして、８月下旬には、かほく市が全国ニュースに流れるほど猛烈な雨が降りました。さらに、栃木県では竜巻による被害。昔は、「異常気象」という言葉を聞くこともあまりなく、全国各地で甚大な被害に遭うことはなかったように思います。

９月２８日（土）の運動会では、お忙しい中、ご協力・ご声援をいただきまして、大変ありがとうございました。赤白の白熱した、盛り上がりのある大運動会を実施できたことを大変嬉しく思います。運動会後に、６年生にお話を聞くと、「スローガンのように、みんなが一生懸命がんばって、よい思い出になりました。」「優勝をめざして、みんなが一つになりがんばりました。」などの成長を実感させるすばらしい感想がありました。

さて、先日の職員会議で、私ども教職員の自戒のために、下記の文面を印刷し、子どもを大切にした学校にしようと話しました。枠内の言葉は、長野県で４０年間、教師を勤めた毛涯章平（けがいしょうへい）先生の著「肩車にのって」の冒頭に書かれている「教師十戒」から引用したものです。「教師はどうあるべきか」という問いかけに答えるすばらしい教えであると、私は受け取っています。そして、言葉の中に出てくる「教師」を「親」や「地域」に代えて読むと、その責任も自ずと違って考えさせられる文になります。子育てのご参考にしてみてはどうでしょうか。

1、子供をこばかにするな。教師は無意識のうちに子どもを目下のものと見てしまう。子どもは、一個の人格として対等である。
2、規則や権威で、子どもを四方から塞いでしまうな。必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。
3、近くに来て、自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。
4、ほめることばも、叱ることばも真の「愛語」であれ。（「愛語」とは、相手の身を思いやって吐き出すことば）愛語は、子どもの心にしみる。
5、暇をつくって、子どもと遊んでやれ。そこに、本当の子どもが見えてくる。
6、成果を急ぐな。裏切られても、なお信じて待て。教育は根くらべである。
7、教師の力以上には、子どもは伸びない。精進を怠るな。
8、教師は「清明」の心を失うな。ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。不機嫌、無愛想は、子どもの心を暗くする。
（「清明」とは、自然で明るく、ゆったりとすること）
9、子どもに素直にあやまれる教師であれ。過ちはこちらにある。
10、外傷は赤チンで治る。教師の与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。

この２学期、子どもたちが大きく成長し、保護者の皆様の期待に応えることができるようにしたいと思っております。